代表者決意表明

（女性――和田　明さん）

本日は成人を迎えた私たちの門出にあたり、このような盛大な式典を開催していただきまして、誠にありがとうございます。また、楫野市長をはじめ、ご来賓の皆様には心温まるご祝儀と激励のお言葉を賜り、重ねてお礼申し上げます。幸いコロナ禍も収束に向かい、健やかにハレの日を迎えられたこと、マスク姿のまま別れてしまった友人と再び顔を見合わせられたことを、大変嬉しく存じます。

大学進学のため初めて大田市を離れた時、新しい環境への期待とともに、都会での暮らしや将来に対し、漠然とした不安を感じることもありました。しかし、そんな時に自然と思い出されるのは、いつも変わらず愛し、応援してくれた家族や、幼いころからたくさんの幸せを分かち合ってきた友人、学問も人としても学ばせていただいた先生方など、大田市で関わってきた人達の存在でした。「どんなに上手くいかなくても、私にはあの人がいる」、そう思える大切な人がいるということが、どれほど心の支えになったでしょうか。同時に、三瓶の山や川、夕日を反射する大きな海は、良い時も、そうでないときも、私たちの心を穏やかに包み込んでくれていたのだと知りました。生まれてからたったの20年間かもしれませんが、人生の多くを大田市で過ごしてきたこと、それが今の私たちを創ってくれたことを、きっと私は生涯誇りに思います。二十歳を迎えた今、沢山の人に愛され、生かされてきた命と経験を、次の世代へ繋げていくことが私たちの使命であると思います。私たちはそれぞれの人生の主人公として、そして自覚と責任を持った大人として、幸せに面白く生きていきます。まだまだ未熟ではありますが、どうかこれからもご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

（男性――木下　紘征さん）

私は幼いころから夢があり、夢を叶えるために大学に進学しました。

しかし、昨年に私はとあることが、理由で大学を中退し、夢を諦めてしまいました。そんな時、ここ大田の友達と会う機会がありこんな言葉をかけてもらいました。「まだ20歳だし、やり直しはいくらでも聞くけん、何か新しいことしてみたら？」この言葉をきっかけに私は島根県の伝統文化でもある神楽を始めました。始めてから、沢山の目標が出来るようになりました。大会で優勝したい、個人賞を取りたいなど、大人になっても学生の頃の部活のように熱中できるものが沢山あります。また、大人になっても熱く指導して下さる方がいたり、地域の方々に応援されたりと、ますます、地域を活性化させたいという気持ちが湧き出てきました。

私はこれからもずっと、自分が何かを頑張れば誰かが、楽しんでくれたり、応援してくださることを信じています。今日のこの式から、地域のために小さいことでも一緒に頑張っていきましょう。私たちの頑張りが集まればいずれ大きな力になると思います。一緒に頑張っていきましょう。

皆さんもこれから、悩み、辛いことがでてくると思います。そんな時は今となりにいる友を頼ってみましょう。ここ大田には心温かく、沢山応援してくれる人たちが待っています。焦らず、ゆっくりと進み、一緒に夢を叶えていきましょう。

（男性――宇谷　銀士郎さん）

私は生後間もなく慢性疾患の病気を発症し、その後遺症として障害を持ちながら毎日過ごしております。特別支援学校を卒業してからは、市内の事業所に就職し、バスで通勤しております。私が社会に出て一番感じたことは、生きることの難しさでした。これまでの私は、家族や学校、地域のみなさんに守られて育ちました。様々な問題に直面するたびに、いろいろな人たちが助けてくれました。生きる力を育ててもらえたはずなのに、いざ一人で社会の中に入ると難しいことばかりでした。私は自分の気持ちを声に出すことが難しいので、一人で悩み、胸が苦しくなり

涙を流す日が増えました。でも、そんなときに家族は毎日笑顔で迎えてくれ、私の表情を察し、悩みを吐き出させてくれました。また、職場では、私の話を聞いてくださる人たちがいてくれました。他にもいろんなことを分かち合える友達がいました。私は社会に出ても支えてくれる人たちがいることに気づき、一人で頑張らなくてもいいのだと思いました。二十歳になった今も、人に支えられて生きています。障害のある私が毎日笑顔で過ごせるということは、幼いころからこの地でたくさんの人との関りを持ち、支えられ助けられてきたからです。本当にありがとうございます。そしてこれまでは私から「ありがとう」という言葉が当たり前でしたが、これからは「ありがとう」を言われるように、誰かの役に立つ大人になりたいです。そしてこれまでの恩をお返しするために、社会に貢献できる人になりたいと思います。

私の胸の中には「みんなちがってみんないい」という言葉があります。特別支援学校でずっと言われていた言葉です。誰かがいるから私がいます。誰もが大切な一人の「人」であることを教えてくれた言葉です。二十歳を迎えた私のこれからは、障害のある人たちや、健常な人たちが支え合いながらも同じように生きる街づくりをし、みんなが幸せを感じてくれる世の中にしていきたいと思っております。それが、私にとっての願いでもあり、希望でもあります。

令和6年1月4日

代表　和田　明
木下　紘征
宇谷　銀士郎